

# 中高一貫教育における教育課程の構築について

高知県立高知南高等学校 教諭 田中 修一

## 1. はじめに

公立学校における中高一貫教育は、平成 11 年にスタートした新しい学校制度の一つである。

中高一貫教育では、中学校 1 年生から高等学校 3 年生までの 6 年間というゆとりある時間の中で、生徒たちは高校受験という重圧から解放され、「学習知識を大量に、短期間に獲得する」ことを第一の目的としていた従来の受験学力観のもとでは十分に育成し得なかった思考力や想像力、そして表現力といった「新しい学力」を育むことができることが、この教育制度の最大の特色である。

これらの「見えない学力」は中学校と高等学校での学習を切断することなく、長期的な視点に立って 6 年間の教育計画を段階的に、系統的に配列することでその効果を発揮させることができる。つまり、中高一貫校独自の教育課程の構築が求められるということである。

本研究では、この新しい学校制度のもとで、中学生と高校生の表現力の実態に迫り、その特徴と問題点から中学生に求められる表現力の国語科教育における主に表現力育成の観点から、教育課程構築の視点を示すことを目的とした。

## 2. 研究目的

教育制度の一つとしての中高一貫教育について、昭和 46 年の中央教育審議会答申、昭和 60 年の心理教育審議会答申、そして平成 8・9 年の中央教育審議会答申のそれぞれについて内容を整理し、導入までの経緯とその意義と目的についてまとめる。

また、国語科教育において中学校と高等学校の接続について、現在の学習指導要領の目標と内容を比較し共通点と差違を整理する。また、学習指導要領で理念化されている「言語の教育」の立場に立つ国語科教育の学力観の推移を整理する。

実践的な研究として、中学生と高校生の表現力の実態について、アンケートや文章の分析などから考察し、特に表現意欲、表現語彙についての中高生の共通点と差違を考察する。そして、生徒の表現意欲を向上させる目的で授業実践を行う。

これらの文献研究と実践研究から考察される中高一貫教育における国語科教育についての教育課程の在り方について試案を示す。

## 3. 公立学校における中高一貫教育について

公立学校における中高一貫教育導入についての提言は、昭和 46 年の中央教育審議会答申（「今後における学校教育の拡充整備のための基本的施策について」）から始まる。同答申には、当時の教育的問題として、中学校と高等学校の分割は青年期の内面的な成熟に好ましくない影響を及ぼすおそれがあるとして、中学校と高等学校を接続し、これを一貫した学校として教育を行うことが提案される。しかし、性急な学校制度の改革は混乱を生じさせるおそれがあることを危惧して、科学的な根拠に基づき「学校制度上の特例」を設け「先導的な試行」を経た後、導入することが望ましいということも付記される。<sup>(1)</sup>

その後、昭和 57 年の臨時教育審議会第一次答申においても「6 年制中等学校」の提言がなされる。同答申における 6 年制中等学校の意義として「中等教育は、この青年期にある生徒の多様性や、今後の時代に即応できるように、その構造を柔軟なものとするとともに、多様な教育の機会を提供できる

ようにする必要がある。」<sup>(2)</sup>と生徒の個性を尊重する教育の一つとして一貫教育が提案される。「多様化」、「個性化」は学校制度の抜本的な改革を目指した四六答申の基本姿勢とは違い、それまでの3・3制の中等教育制度の長所も認め、6年制学校と併存し、学校選択を生徒や保護者という個人に任せるかたちが提案された。学校選択という方式は制度改革においては実効性の高い方法である。しかしながら、併存、選択において、希望者が多数いる場合には選抜が行われ、結果的に受験競争が低年齢化することを危惧する声が多く上がり、本答申後、短期間で6年制中等学校（中高一貫校）が導入されることはなかった。

中高一貫教育の導入が实际的に示されたのは平成8・9年の第15・16期中央教育審議会第一・二次

表1 中高一貫校の類型

<p>同一の設置者（都道府県、市町村、学校法人など）が中学校・高等学校を併設し、入学者選抜を課すことなく接続するという形態</p> <p>(a) 独立した中学校と高等学校を併設する場合</p> <p>(b) 一つの6年制の学校（いわゆる6年制中等学校）として設置・運営する場合</p> <p>一校又は複数の市町村立中学校と都道府県立高等学校とを連携させ、高等学校入学者選抜を行わず、6年間の計画的・継続的な教育を行うという場合</p>
---

答申で、中高一貫教育の利点として、「高等学校入学者選抜の影響を受けずにゆとりのある安定的な学校生活が送れること」、「6年間の計画的・継続的な教育指導が展開でき効果的な一貫した教育が可能になること」、「6年間にわたり生徒を継続的に把握することにより生徒の個性を伸ばしたり、優れた才能の発見がよりできること」、「中学1年生から高校3年生までも異年齢集団による活動が行えることにより、社会性や豊かな人間性をより育成できること」が示

された。この四点は、中高一貫校における教育課程構築の基本的な視点となる。しかし、その一方で「受験競争の低年齢化のおそれ」、「（一貫校で）受験準備に偏した教育が行われるおそれ」、「小学校段階での進路選択の困難」、「心身発達の差異が大きい生徒を対象とすることで学校運営に困難を生じる」、「生徒集団が長期間固定化されることにより学習環境になじめない生徒が生じるおそれ」を問題点として指摘している。つまり、6年間のゆとりある時間の使い方を、単に高校卒業時の受験指導の目的にのみ使うのではなく、個性を育む視点や一人ひとりの学習を確保し、個別的な学びの保証する視点を持つことと、長期間にわたる学習計画の中で、生徒の学習意欲を常に喚起させるような学習に対する刺戟をどのように与えていくかを考える必要がある。

そして、中高一貫教育校には表1のような三つの類型が示された。平成17年現在で、連携型はすべての中高一貫校のうちの約43%、併設型は約46%、そして中等教育学校は約11%の割合で全国で設置されている。文部科学省は、今後、全国の通学区域に少なくとも1校の中高一貫校を設置し、最終的には500校程度開設することを目標としている。

さて、中高一貫教育の意義と必要性を説いた第15期中央教育審議会より2年ほど前に宮崎県では県独自の方針として中高一貫校を設立していた。また、高知県では平成8年から中高連携教育を行っており、中学校と高等学校との接続について全国に先駆けた取り組みを行ってきた。つまり、中高一貫教育に関して、国が導入に対しての議論を始める前にすでに地方自治体でその意義をいち早く認め、その当時の法の枠組みの中で工夫された教育運営を行っていたということになる。

#### 4. 国語科教育における中高一貫性の研究

平成10年（小学校・中学校）・11年（高等学校）に改訂された学習指導要領において、「言語の教育」としての国語科教育として、表現力育成の重視の姿勢が小学校・中学校・高等学校において強調された。また、改訂に先立つ教育課程審議会の答申によると、中学校での国語科教育の目標は「社会生活に必要な言語能力を確実に育成すること」であり、高等学校においては「中学校までに培われた言語能力をさらに総合的に発展させるとともに生徒の能力・適性、興味・関心等に応じた指導を一層充実して、社会人として必要とされる言語能力の基礎を確実に育成する」となっている。つまり、中

学校で社会的に必要とされる言語能力は全領域的に習得することとなっており、高等学校では、その上で生徒一人ひとりに応じた個性的な言語能力の習得が求められている。また、高等学校での学習は「社会人として必要とされる言語能力の基礎」であり、中学校での「社会生活に必要な言語能力」より上位に立つものとして掲げられている。「社会人として」は職業的な言語能力を含んだ表現であるが、実際的には中学生・高校生とも学校における国語科教育での学習が社会や社会人として必要とされるものであるという自覚はなかなか持ち得ないところがある。

このように国語科教育が「社会（社会人）として必要な言語能力の育成」を目指す、「言語の教育」としての視点を強調しているのは、従来の「文学的な文章の詳細な読解に偏りがちであった指導」を反省し、より日常的なコミュニケーション能力や、自分の考えを自分の言葉で表現する能力といった日常的な言語能力の育成の視点へと転換する意図を示している。そして、それらは子どもたちの言語生活の特徴が「人前できちんとあいさつができない」、「相手の名前をきちんと呼ぶことができない」、「喜怒哀楽、自分の感情は自分の言葉でそれなりに表現できるのだが、目的や意図に応じて適切に表現できる能力が十分に育っていない」、「気持ちの読み取りはよく追究しているけれども、読書好きではなく、活字離れ、読書離れが進んでいる」、「自分の考えをしっかりと子どもに育っていない」（小森 2000）<sup>③</sup>という衰退傾向にあることから、日常生活における言語能力の育成を重視するに至っている。

学習指導要領において、「話す・聞く」、「書く」、「読む」、〔言語事項〕の3領域1事項に改訂された小・中学校の「内容」と同じ構造を持つ、高等学校「国語総合」との接続は、中学校での学習内容をさらに発展させる観点でなされている。また、今回より新たに示された言語活動例においても、中・高には活動内容の共通点が多い。これも中学校での活動を、高等学校でも継続的に行い、発展させていくということである。以上のような点を中高一貫教育の教育課程編成上で観点としてとらえることができる。

その一方、授業時数・単位数の比較では、国語総合では「読むこと」への配当時間が他領域と比較して多く、「話す・聞く」、「書く」などの表現力を育成する観点においては中学校からの接続をどのように果たすかが課題である。

また、国語科教育を歴史的に見た場合、日常生活における言語能力の向上を目指すという学力観の一方、「ものの見方、感じ方、考え方を豊かにする」という情意、態度的な能力育成も包括されるようになり、「形式」、「内容」の二面性を持った学力観が論じられてきた。

しかし、近年、子どもたちの生活環境や人間関係などが大きく変化し、コミュニケーション能力の低下が問題とされている。そのような言語環境の改善を図るのが、教育課程審議会答申における国語科教育の柱である「言語の教育」の重視であり、また現行の学習指導要領のテーマである「伝え合う」能力の育成である。

## 5. 中学生・高校生の実態調査

中高一貫教育において表現力育成の視点を定めるため、中学生・高校生は日頃の国語の授業において、どのような学習を求めているのかを調査した。これは中高生が国語の授業にどのような活動を求めるかを「話す・聞く」、「書く」、「読む」、「その他言語知識を得る活動など」の領域別に問うものであった。それらの結果から中高生とも、国語の授業における活動全体の中で「小説や物語などをもっとたくさん読むこと」を授業内容として求めていることが分かった。（「読む」領域中の約76%、全領域中では約43%）それに対して、「自分の意見を発表すること」（「話す・聞く」領域中の約11%、全領域中では約2%）、「討論やディベートなどを行うこと」（「話す・聞く」領域中の約17%、全領域中では約10%）、「読書感想文を書くこと」（「書く」領域中の約15%、全領域中では約6%）などの表現に関する学習については、消極的であるという意識があらわれた。

次に、「話す」、「聞く」、「書く」、「読む」といった言語能力は将来どのように役立つかを自由記述

表2 数字はいずれも全体の%

話す	中学校	高校	全体
1 自己主張ができる	23.1	32.5	25.5
2 コミュニケーションの能力	23.1	17.5	21.7
3 敬語の力	8.8	11.3	9.4
4 仕事をする上で必要	11.8	2.5	9.4
5 無回答	9.7	8.8	9.4
6 入試など	9.2	6.3	8.5
7 その他	7.1	8.8	7.5
8 話し合いや会議など	4.2	6.3	4.7
9 会話の力を付ける	2.9	6.3	3.8
聞く	中学校	高校	全体
1 相手の考えを知る・理解する	37.4	31.3	35.8
2 その他	22.3	20.0	21.7
3 無回答	16.0	12.5	15.1
4 仕事をする上で必要	6.7	8.8	7.2
5 コミュニケーションの能力	3.8	10.0	5.3
6 話し合いや会議など	3.8	5.0	4.1
7 集中力	3.8	3.8	3.8
8 情報を得ることができる	1.7	7.5	3.1
9 会話の力を付ける	2.5	1.3	2.2
10 入試など	2.1	0.0	1.6
書く	中学校	高校	全体
1 書類などが書ける	19.7	25.0	21.1
2 その他	18.5	25.0	20.1
3 無回答	12.2	10.0	11.6
4 自分の気持ちを書き、考えを深める	12.2	7.5	11.0
5 入試で役立つ	12.6	1.3	9.7
6 表現力が付く	5.0	10.0	6.3
7 字を(きれいに)書く	5.5	5.0	5.3
8 手紙を書く	4.2	7.5	5.0
9 漢字を使うことができる	5.0	3.8	4.7
10 レポートを書く	3.4	3.8	3.5
11 知識などを残すことができる	1.7	1.3	1.6
読む	中学校	高校	全体
1 読解力や理解力を高める	19.3	17.5	18.9
2 読む	16.4	10.0	14.8
3 無回答	14.7	15.0	14.8
4 知識・情報を得る	10.1	26.3	14.2
5 その他	13.9	12.5	13.5
6 考えを深める	13.4	11.3	12.9
7 想像力・感性・感情を高める	8.4	7.5	8.2
8 楽しむ	2.1	0.0	1.6
9 思考力・集中力をつける	1.7	0.0	1.3

で回答してもらった。その結果について、各領域別にまとめると表2のようになる。

注視したいのは「話す・聞く」において「コミュニケーションの能力」を意識した回答が一定数いたということである。中学生、高校生とも「話す・聞く」ことが日常生活におけるコミュニケーション活動の基礎となることは認識している。一方、「書く」における「自分の気持ちを書き、考えを深める」、「表現力が付く」といった思考力や認識力、そして表現力の必要性は学校における活動からは必要性を感じられていないことを意味している。日常生活における「書く」ことの必要性は「書類」、「入試」などであり、書くことが思考や認識を深めることに直結していることを自覚していないことになる。

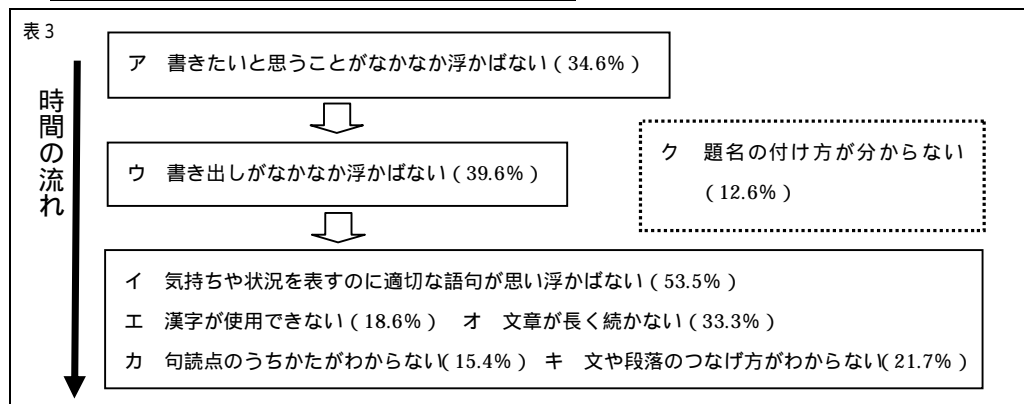
また、自己表現の意識を調査した中で、自分の思い・考えを表現するための手段としては「手紙」、「メール」などの通信手段が適しているという意識結果があらわれた。

さらに、「文章を書く中で困難と思うこと」について、文章を叙述する際の時間の流れにそってまとめると表3のようになる。これを見ると「書きたいこと、書き出しが浮かばない」という文章に書き始めに関する発想力、思考力の不足と、「気持ちや状況を表すのに適切な語句が思い浮かばない」という、書き始めたとしても、表現を支える語彙が不足しているという意識が非常に高いことがうかがわれた。

「書くこと」に関して生徒たちのつまづきはどのように導入から書き始めの部分である。書く学習内容において、「書かない」、「書けない」と無為に時間を過ごしている生徒たちの実態が表出するかたちとなった。

そこで、作文学習において、どのような導入方法を用いれば、生徒の発想を補助することができるかを明らかにする

表3



を明らかにするため、中学校3年生に「(A)書き出し・途中・最後の書き方を示す」、「(B)ブレイン・ストーミングの方法を用いる」、「(C)手紙

表4 作文を時間内に書き上げた割合

A書き出し	B手紙	Cブレイン	D例文
71.4%	7.7%	29.4%	84.6%

まったく何も書かれてなかった割合

A書き出し	B手紙	Cブレイン	D例文
7.1%	61.5%	35.3%	0.0%

助する方法として、文章のかたちを示すことは有効である。その一方、生徒たちが自分の表現手段としてあげた「手紙」は、あくまでも相手意識が明確な場合のことであり、単なる表現手法としては効果的ではないことがうかがわれた。

表5 井上の調査による小学校6年生の作文語彙について

〔文数平均〕	記事文・・・17.5	叙事文・・・29.9
〔語彙数平均〕		
(延べ語)	記事文・・・132.84	叙事文・・・208.98
(異なり語)	記事文・・・18.90	叙事文・・・41.24

表6 高校1年生のエッセイにおける作文語彙について

〔文数平均〕	8(最大17 最小4)
〔語彙数平均〕	
(延べ語)	131.3 (異なり語) 70.2

これは、彼らの文章表現語彙が小学校卒業段階から成長していないことを意味していると考えられる。

その原因として、小学校では盛んに文章表現についての学習が行われることに対して、中学校、高等学校ではその割合が下がっていることが考えられる。(教科担任制などで作文学習の内容が変質することもある。)また、多くの中学校では、特に中学校3年生段階では間近に迫った高校受験への対応のために作文など表現力育成に関する時間を相当数確保できない現状もある。さらに高等学校でも、

表7 中学生 意味的述語の分類

動 詞	430	73.9%
(名)+だ	95	16.3%
形容 詞	50	8.6%
体言 止め	4	0.7%
不 明	3	0.5%
全体	582	

表8 高校生 意味的述語の分類

動 詞	243	65.7%
(名)+だ	69	18.6%
形容 詞	50	13.5%
体言 止め	4	1.1%
不 明	4	1.1%
全体	370	

の形式にして書く、「(D)具体的な範文を例示する」四つのコースを設定し、文章内容の発想までの時間経過、そして限られた時間の中で文章をどれくらい書けるかを見た。結果は表4の通りである。(A)・(D)のコースの生徒たちが短い時間で自分の書く内容を発想し、文章も多く書けた。その一方、(B)・(C)のコースでは発想までの時間を多く要し、また書いた分量も少なかった。発想を補

次に、先の調査で文章の書くことにおいて「表現語彙の不足」を実感している生徒たちが多くいたことから、彼らの表現語彙について数量的な調査を行った。

まず、高校1年生に対して、「季節に関するエッセイ」を書かせ、その文章における語彙量を調査した。井上(2001)<sup>(4)</sup>が行った小学生に対する調査と結果と比較すると、高校生の語彙量は基本的に小学生を下回っていることがわかった。(表5)(表6)

これは、彼らの文章表現語彙が小学校卒業

先の指導要領の時間数をみるとわかるように、「(国語表現)」を必修科目として設定していない限り、読解力の育成に時間をかけることにより、表現力育成は軽視されてきた。中学校3年生から高校生にかけてこれまで培ってきた表現力、または表現意欲は著しく減退し、その後も回復することなく、また生徒たちの意識にも認識力や思考力を育成するための「書くこと」の重要性には気付かされることなく時間が過ぎてしまっていることをうかがわせる。

さらに、中学校3年生・高校1年生に対して、「自分のことに関する作文」を書かせ、量的な比較、そして語彙の比較を行った。文字数・文数・段落数などでは中高生もほぼ同じ傾向がうかがわれたが、文字数については中学生で、多く書く生徒の層と、あまり書かない(ほとんど書かない)生徒の層が二極化しているのに対して、高校生は基本的に400~600字程度に集中していることがわかった。そして、述語における品詞別の語彙を比較すると、中高生とも述語語彙は動詞が多く(表7・8参照)形容詞については高校生の若干使用割合が高かった。わずかながら高校生に述語語彙の広がりが認められるが、中学生から高校生にかけ

て、文章表現力の大きな成長は見られなかった。

中高生の文章表現における文体的な特徴として「話し言葉」で書くことが顕在化した。特に接続詞として「なので」、「でも」などを用いる割合が高かった。「話し言葉」と「書き言葉」を区別できないことも、彼らの文章表現意欲を衰退させている原因の一つであるということがうかがわれた。

#### 6. 表現意欲の育成を意図した実践例

表現する楽しさを感じとり、表現意欲を喚起させる取り組み例についての実践例を報告する。

〔中学生 「自分新聞をつくろう」〕

一年間のできごとを振り返り、新聞記事のかたちで報告することを条件に新聞づくりを行った。原稿用紙では書く言葉が浮かばず、書けなかったようなことを、自分で新聞紙面のレイアウトを考え、見出しやイラストなどを用いて書くことについては積極的に取り組む生徒が多かった。

〔中学生 「絵本をつくろう」〕

4・5歳の幼児が読むことを意識した絵本づくりを行った。ストーリーを考えること、また、幼児向けの語彙を考えることに苦労したが、ほとんどの生徒が積極的に取り組んだ。相手意識を考える場合、自分のこれまでの経験が生かせる方法である。また、中学生にとって絵を描きながら文章を書くことは

楽しさを感じられ、意欲の喚起につながる。

〔高校生 「手紙をかこう」〕

自分の夢を叶えるために、親に借金を申し込むという架空の設定で手紙を書いた。架空の設定ではあるが、相手意識は明確であり、また、自分の状況と少なからず関連もある内容から、多くの生徒が現実感を持って、積極的に取り組んだ。真摯な気持ちを伝えるためには、形式に則った手紙の方が適切であるという感想を持った生徒もいた。

表9 中高一貫の「書くこと」教育課程の例

学年	教科・科目	時数	内容
中1	国語	4	自己紹介の文章を書く。 読書感想文の書き方を学ぶ。 学校紹介のパンフレットを書く。 小学校と中学校の違いを説明する文章を書く。
中2	国語	3	手紙の書き方を学ぶ。 部活動での体験を書く。 体験学習の報告文を書く。 話題を選び、説明する文章を書く。
中3	国語	3	修学旅行での体験を書く。 職場体験学習の報告を書く。 プレゼンテーションのための資料を作成する。 クラスや学校、社会に対する提言を書く。
中3	選択国語 〔選択〕	1	創作的な文章を書く。 自分のことについて紹介するパンフレットを書く。 新聞への投稿記事を書く。
高1	国語総合	4	高校生になった自分のことを書く。 話題を選び、説明する文章を書く。 新聞記事などから話題を選び、意見を述べる文章を書く。 未来の自分への手紙を書く。 中学生に推薦したい本の紹介を書く。 和歌を選び、その内容を物語にして書く。
高2・3	国語表現 国語表現 〔選択〕	2	事実に基づいた報告の文章を書く。 反論の文章を書く。 パンフレットやリーフレットを作る。 日常生活や社会一般について観察したことの記録を書く。 テーマを設定し、事実を調べ、説明や意見の文章を書く。

#### 7. 中高一貫教育における教育課程構築の視点

中高一貫教育の教育課程編成におけるキーワードは「個性」と「自立」である。中高一貫校においては、6年間の課程の中で個性を探る時期から個性を伸ばす時期までを一貫した取り組みで教育内容を考えることができる。

また、教科編成においては「共通性」と「多様性」の関係で教育課程を編成する必要性もある。「共通性」とは基礎・基本の確実な定着であり、「多様性」とは生徒の特性や実態、進路の希望等によって規定されるものである。

これらの要素を教育課程に反映させ、なおかつ中高一貫独自の教育課程へと特色化

させる視点を<sup>(5)</sup>工藤(2000)は次の四点に集約する。

- (1) 自ら学び、自ら考える力の育成を目指す。
- (2) 基礎・基本の確実な定着を図る。
- (3) 自己理解・自己探求を深めさせ、個性を生かすための工夫。
- (4) キャリア教育の系統的な実施。

これらの内容を教科・特別活動・総合的な学習の時間で具現化させるようにする。

また、6年間の区切りを中学校段階(前期)と高等学校段階(後期)に二分するだけでなく、2年ごとに3つの区切りで教育課程を構築することもできる。しかし、併設型では高校段階から新たに新入生を迎えることから、「1(入門基礎) - 2(個性探究) - 2(専門基礎) - 1(個性の伸長)」制という4区分を敷くこともできる。

そして、中高一貫教育に関して、国語科表現指導で系統的な教育課程案として表9の内容を示し、提案する。

## 8. おわりに

今回の研究により、中学生と高校生の文章表現力の特色を以下のように集約する。

- (1) 中高生が自分ことに関わる内容を文章化した場合、概ね原稿用紙1枚程度(380字~450字)の内容を書くことができる。
- (2) 中学生では書く分量について、多い層と少ない層の二極化が見られた。
- (3) 述語表現においては中高生ともに動詞が多い。
- (4) 述語表現における形容詞の使用は高校生が若干多い。
- (5) 全述語表現に対する引用表現の使用割合は高校生の方が高いが、個人が文章中で引用表現を多く用いる割合は中学生が高い。
- (6) 接続詞表現においては「でも」、「なので」、「だけど」などの「話し言葉」的な表現が中高生とも多く見られた。

生徒の文章表現意欲を喚起させる方法としては、一つは書き出しの指導を工夫し、何を書くかを明確にすることで「まず書き始める」状況をつくることことができる。さらに題材に関することとしては、「絵本」や「手紙」の実践例のように、「架空のことを書く」ことで、生徒たちは積極的に書くことに取り組むようになる。これらのことは中学生・高校生に共通して見られたことであり、書くことこの教育課程構築の参考となる。そして、これらの事実を認識できたことを成果としたい。

課題としては、自己認識を深めるための「書くこと」における題材の研究が不十分であったことである。また、語彙の比較においては、中学生と高校生との間に歴然とした差は見られなかった。つまり、中高生の文章表現力、語彙力は同傾向であるとしたら、小学校段階と比較して、どの段階からこのような状況になるのかを調査する必要がある。

そして、教育課程を考えるためには「どのような目標を持ち、どのような方法を用い、どのような結果を予測して」構築にあたるのかという視点を持つ必要がある。中高一貫教育の特色ある教育課程はまだ開発途上であり、今後、あらわれてくる結果から新たな視点を持ち、さらに研究を続けなければならない。

## 注)および参考文献

- (1) 「先導的試行」は10年間程度の時間をかけることが望ましいと答申には記されている。
- (2) 「臨時教育審議会 第一次答申 第3部 当面の具体的改革提言 受験競争過熱の是正のために (2)機会の多様化・進路の拡大 6年制中等学校」(1985年6月26日)
- (3) 「新学力観に立つ国語科の改革」『実践国語研究別冊 2000年版 No.212』(2000) 明治図書
- (4) 『語彙力の発達とその育成 - 国語科学習基本語彙選定の視座から - 』井上一郎(2001) 明治図書
- (5) 「中高一貫教育における教育課程編成の在り方」工藤文三 『中高一貫教育推進の手引き』(2000) 学事出版